

囃子を聴くことと過去の記憶をめぐるナラティブ分析
—山車活動のワークショップを通して—

Narrative Analysis on Listening to Hayashi and Recollections of the Past: Through a
Workshop on Float Activities

松田新史

Shinji Matsuda

青山学院大学大学院 社会情報学研究科 社会情報学専攻 ヒューマンイノベーションコース
博士前期課程 2 年

Graduate School of Social Informatics, Aoyama Gakuin University, M.A. Program in
Human Innovation

c8123009@aoyama.jp

概要:

本発表は、現在執筆中の修士論文の一部に基づき、地域的音環境に対する記憶想起と語りにおける意味構成プロセスを検討するものである。2024 年 10 月に愛知県 A 市 J 町で実施した山車祭りワークショップを対象に、参加者の語りを質的に分析し、特に囃子(音)の知覚がいかに記憶・情動・身体性と結びつき、語りの中で再構成・意味づけされるのかを明らかにすることを目指す。音経験の記憶的・語用的機能を通じて、文化継承における認知的過程を考察する。

キーワード: 山車祭り、ナラティブ分析、音の記憶、囃子、ワークショップ

1. はじめに

愛知県等で盛んに行われている山車祭りは、地域住民による世代を超えた参与を通じて継承されてきた文化実践である。本研究では、山車祭り文化が根付いていない J 町という地域において、山車祭りの要素を含んだワークショップ(以下 WS)を実施し、その見学者・体験者へのインタビューを通して、音響体験がどのように記憶され、語られているかを明らかにすることを目的とする。

2. 方法

2.1. ワークショップの実施

2024 年 10 月 27 日、愛知県 A 市 J 町の一画にて山車活動の WS を実施した。当日の参加者数は見学者を含め子供 101 人、大人 193 人となりそのうちの 13 名に半構造化インタビューまたは聞き取り調査を行った。対象者の年齢は 15 歳から 85 歳であり、山車祭り経験の有無等を考慮しつつ分類した。

2.2. 予定している分析手法

インタビュー及び聞き取り調査時の語りデータをもとに、音の記憶に関する記述や、感情の表出に着目し、ナラティブ分析の手法に則って分析を行う。

3. 結果

ワークショップの準備段階から終了後にかけて、囃子(音)に対する肯定的な評価は、囃子の経験の有無にかかわらず、特に中・高齢層の参加者から多く見られた。

この評価は、音刺激が過去の記憶や感情の想起を促進し、経験の有無を超えて意味づけがなされていた可能性を示唆する。

3.1. Fさんの語り

(83 歳・愛知県 S 市出身・37 歳の時 A 市 J 町に移住・山車祭り・囃子の経験なし)

お囃子のない、山車でな、表現が悪いかもしれんけど、大きな箱を引っ張ってるかなっていう、そういう感覚だったという、お囃子のない、山車のね。

文献

鳥越けい子(1996)：第5章 音の風景からたどる都市，佐藤 健二編：『都市の読解力』勁草書房，p. 133-183.

石岡丈昇（2024）エスノグラフィ入門 筑摩青房

スタイナー・クヴァール 他（2016）. 質的研究のための「インター・ビュー」. 新曜社.

3.2. Kさんの語り

(52 歳・愛知県 K 市出身・30 歳頃結婚をきっかけに A 市 J 町に移住・小・中学生時代に K 市内の地元の祭りで囃子の太鼓・笛演奏経験有り)

遠くの方で太鼓の音が聞こえ始めて、でのおお、始まった始まったっていうのは、やっぱりこの太鼓の音がこう聞こえてくると、その、お祭り気分というか、はい、ワクワク感というか、もう始まったなっていう感じはしました。

（中略）

今回はね、山車もね、G くんが持ってきてくれたし、そこに乗ってるお囃子の人たちも、よそから来た人たちなので。子どもたちが練習したわけではないので、あの、ここの地元に根差したものではないイメージはすごく強く持っています。

（中略）

なので、お祭り、そのお囃子があったからお祭り気分っていう気分はとても味わえましたけど、そうですね、そのちょっと差はあるかなと思います。